

光源氏とその周囲

山田 美恵子

源氏物語の主題はその執筆の過程において発展している。作者の文学的精神が内面的に深められたのである。そしてその後構想は作者の主体性をよりたしかなものにしていく方法をとつて具体化されていったのである。このようなことは既に一般の認めるところといつてよいであろう。作者が昔物語的な構想の粹のなかから、次第に人間的な関心を大きくしていったそういう方法についてすぐれた論文がいくつか発表されている。多くの場合まず端役のうえにその人間らしさは見出されてきているのである。

主人公光源氏は叙事詩的英雄性の貴族文化社会に再生した英雄像であつた。しかしながら彼もやがて確固たる構想の縄縛を抜け出で、人間的悩みと罪とを感じして広く人間の本来的な姿の理解にたえるような人物像に描き進められるようになるのである。おのずから物語としての主人公の性格を内容的に変えていったのである。その過程を、彼が持ったその周囲の人々との対応関係をと

らえることにより考えることができると思う。そういう立場から光源氏のそば近くに在るものとして、その青年時代をいつも彼との比較において描かれ、後に光源氏が政敵として第一に考えねばならなかつた頭中将と、光源氏の表向きの第一子夕霧とを考えてみたい。そしてこの二人が同時に光源氏の生活の中に重みを持つてくる事件として夕霧の雲井雁との恋物語を考えてみたいと思う。

夕霧の物語は彼が光源氏の嗣子として、その高く厳しい教育理念に従つて、大学教育を受けるように定められる少女巻からはじまる。そして藤裏葉における大団円にくみ入れられて、光源氏の高く世に抜きん出た宿世の顕現者として内大臣の婿におさまるところで一応は終る。

しかしながら、私達はこの物語を、単に光源氏の子息夕霧の、光源氏の栄華の一具現者としての物語であるという読み方をし

はすましておけない叙述に出あうのである。この夕霧の雲井雁との物語は光源氏の物語といかに関連しつつ語り進められているのであろうか。

さて夕霧の元服にうち続いての大学入学、その後の学問中心の生活、寮試合格という一連の記事が終ると、斎宮の女御（秋好中宮、六条御息所の女）が源氏の二代ひき続いての立后ということ、弘徽殿（頭中将の女）、式部卿女御をおさえて中宮につき、光源氏、頭中将がそれぞれ太政大臣、内大臣に昇進するという記事がある。ここから叙述は大宮邸にうつる。

まず、「人がらいとすくよかに、きらきらしくて、心もちるなども賢くものし給ふ。」（引用本文は朝日古典全書版による。重大な）とい（異同は「校異源氏物語」により傍記した。）う内大臣の性格の記述があり、続いて彼の娘の一人、雲井雁の出自とおいたち、そして現在夕霧と心をかよわすような関係にあることが語られる。

静かに時雨れる夕暮に政治から解放されて、私生活にくつろぐ内大臣の悠々とした貫録を描出しつつ話は進展する。彼は姫君、大宮を相手にして音楽をテーマに語るのであるが、「女の中には、太政大臣の、山里にこめ置き給へる人こそいと上手と聞き侍れ。物の上手の後に侍れど、末になりて、山がつにて年経たる人の、いかでさしもひきすぐれけむ。かの大臣、いと心ことにこそ思ひ

て宣ふ折々侍れ。」という彼のものの感じ方に注意させられるのである。「いかでさしもひきすぐれけむ。」という推測は事実は誤りであり、明石は名人であつたのであるが、しかしながら、彼がこういう推しはかりをする筋道は道理に叶つていたのであつて、読者はここでこのことばを内大臣の例の負けず嫌いの強がりであるといつて一笑に附してしまふわけにはいかないのである。即ち、「他事よりは、遊の方の才はなほ広うあはせ、かれこれ通はし侍るこそかしこけれ。」という音楽の本質を踏まえた意見であるからである。

作者は、世にすぐれ人にすぐれて遥かに一般をひきはなしている光源氏の超越的な主人公を問題にしているのではない。その時代の最も高い位の貴族——内大臣——の感覚、才能をまともにつかんで、その地点で考え書いているのである。少し早急ない方をするならば、内大臣が光源氏の引立て役としてのライバルという他力本願的な物語世界での存在の仕方をやめて、内大臣自身一人の人間として、独立した人格を持つものとして作者の筆にのせられているということが出来るであろう。^{註1}「ひとりごとにて、上手となりけむこそ、めづらしきことなれ」の一言は、勿論賛美でもなく、また逆説的な皮肉などというものでもなく、彼の衷心よりする疑問ではないだろうか。

しばらくはこうした内大臣が私的公的にいかに考え生きているかを追ひ、源氏物語のこの部分において、以上のような内大臣を、読者がイメージに持つことができるものであるかを確かめていきたいと思う。政治的には勢力伸張の実際的な場面が主にその後宮政策にあつた当代において、彼はさまざまな心労を負つていた。一族の期待を一身に集めていた弘徽殿であつたが、まったく思いがけない斎宮の女御の出現によりその希望は空しいものとされてしまつたし、また次の御代でこそと思うけれども、明石の姫君を思う時、これに勝目があるとは思ひがたいという嘆きである。

この夕べ折から訪れた夕霧を歓待してくつろいだ一時を過ぎた後、内大臣は女房の内緒話に雲井雁の夕霧との関係を知らされる。その残念なことは安眠を許さぬほどであつて、大宮に対する憤懣は押えがたいものがあつたが、その時まず内大臣が二人の關係を思う感慨は「いと口惜しくあしきことにはあらねど、めづらしげなきあはひに、世人もおもひいふべきこと、大臣の、しひて女御をおし沈め給ふもつらきに、わくらばに、人にまさることもやとこそ思ひつれ、ねたくもあるかな、」というのである。

夕霧を婿と認めるには政治的な手段として残しておかねばならぬ管の雲井雁を諦めることであるから、彼には大きな打撃であるに違いない。弘徽殿に続いて、またしても源氏方に負けを見せる

ことになってしまうのだ。しかも今度はいどみあうべく何の準備さえなくて。しかし、一步政治から離れて雲井雁の将来を思う時、夕霧は決して不似合な婿ではないのである。それでもなおこの縁は感心したものとは思われない。「めづらしげなきあはひに、世人もおもひいふべきこと」であるからなのである。ここに内大臣の「人がらいとすくよかに、きらきらしくて……」という紹介は、作者があるタイプの人間を観念的につかみ、それを性格として附与したのではなく、逆にことに合つてこういう考え方、感じ方をする人間として問題にし、その性格を抽象して抜き出した表現なのであるということができよう。

そして大宮に語られることばも「……まことに天の下並ぶ人なき有識にはものせらるめれど、親しき程にかゝるは、人の聞き思ふ所も、あはつけきやうになむ、何ばかりの程にもあらぬ中らひだにし侍るを、かの人の御為にも、いとかたはなる事なり。さしはなれ、きらきらしうめづらしげあるあたりに、今めかしうもてなさるゝこそをかしけれ。ゆかりむつび、ねぢけがましきさまにて、大臣も聞き思すところ侍りなむ。……」というのである。彼が光源氏の生活をも、彼の生活の次元で判断していることを読みとることができるであろう。これ等のことばは押え難い憤懣をぶつけているのであるから、表現の問題としてことばのゆきすぎを

考慮に入れるにしても、内大臣の性格をよく發揮しているといえる。

他の人物をして、光源氏の生活の周辺を語らしめるこのような方法——光源氏像造形が目的のではなく、その人物の感情描出の確な方法として——がとられているということは注目されてよいのではないだろうか。かつては光源氏が物語の唯一の登場人物といつてもよく、他の人は彼を表現するためにのみ描かれるのであつて、決して光源氏をさし置いて、自己目的に思考し、活動することはなかつたのである。それが、内大臣自身の立つ次元に光源氏をも包み入れて自分の感情のほとばしりを述べるということになると、私はここに、かつての頭中将ではない、新しい意義を持つ登場人物として内大臣を認めたいと思うのである。

こうして内大臣は可憐な二人の幼い者たちを嘆かせ、大宮を苦しませつつ、思うがままに事を処していく。弘徽殿女御を帝に逆らつてまでも退出させ、そのお相手役の名目で雲井雁を自邸にひきとる。「いふかひなきことを、なだらかに言ひなして、さてもやあらましと思せど、なほいと心やましければ、人の御程のすこしものものしくなりなむに、かたはならず見なして、その程志の深さ浅さのおもむきをも見定めて、ゆるすとも、ことさらなるやうにもてなしてこそあらめ、……」と政治的な闘争心を持つて、光

源氏の世界に参加するのでもなく、みやびの見地から光源氏の理想性を問題にしているのでもなく、深く彼自身の内部を抉り出しているといえるだろう。

一方夕霧は「六位宿世よ」という侍女の輕侮のことばに心を破られ、夢も覚まされる思いでこの阻まれた恋に自己を沈潜させていく。そして慰めを求めて五節に歌をよみかけてみたりもするが、なにをするにも「六位」、「浅黄の袖」が重く心を押し潰して気の晴れることもない。そして花散里に託されると、彼女の容貌、心情をみるによつても、自分の恋のかえりみをさせられる。それは光源氏の存在の仕方を推測していることにもなるのである。

「……、かくて年経給ひにけれど、殿のさやうなる御容貌、御心と見給ひて、浜ゆふばかりの隔さし隠しつつ、何くれともてなし紛はし給ふめるも宜なりけり」と思う。そういう彼を作者も「心のうちぞはづかしかりける。」と書き添えている。夕霧も光源氏の支配する世界のただその属的な一存在ではなく、光源氏の住むあたりを客観視し得る距離を持つて生きている人物なのである。

少女巻では、夕霧と雲井雁の物語は、光源氏が関与することなく、彼はただ各々の人物の心情の中に、各々の人物との係りあい

に推し測られて生きるだけで、内大臣、夕霧の内心の葛藤を描き

出しながら語り進められているのである。かくて内大臣、夕霧の角逐する物語は玉鬘十帖の半ば、蜚巻末近く、内大臣の夢占の記事の前にひきつがれていく。

玉鬘物語の主題は秋山虔氏「玉鬘をめぐつて」^{註2}その他の論文を参照していただくとして、こうした内大臣、夕霧のような人物を創造し得た作者が、これ等の人々を玉鬘物語の中にいかに組み入れていったかを問題にしてみようと思う。

かつての悲運な恋人夕顔の忘形見、玉鬘を養育する目的で六条院の一隅に住ませたものの、光源氏自身が玉鬘の魅力から離れられなくなつてくると、彼の悩みは深く乱れる。そして蜚巻で有名な物語論が展開されると、物語にかこつけて諄々と口説くが、作者も「かくていかなるべき御有様ならむ」という嘆きをみせており、光源氏、玉鬘の存在様式がはらむ問題は何らかの解決を迫まられているような限界状況にあるようである。

蜚巻は夕霧の内大臣一家に対する反感、自負心が述べられるのに続いて、内大臣が女子を求めているという記事、やがて女の子が発見されるであろうという夢占の記事があつて終つてゐる。そして常夏の冒頭、さつそく新しい一人の女性が登場している。近江君である。

暑い夏の午後、光源氏邸に、夕霧とその友人、内大臣の子息達が集まつた時、なにげない、つれづれを紛わすような会話の中にこの女性が紹介される。それは光源氏が、内大臣が大変なもの笑いの種となるような女性をひきとつて困つてゐるということを確かな筋から情報を得ておきながら、素知らぬ体で子息達に質問を發しているのである。内大臣の失敗談を耳にした光源氏の意地の悪い質問である。

「いと多かめる列に離れたらむ後る雁を、しひて尋ね給ふが、ふくつけきぞ。いと乏しきに、さやうならむものくさはひ、見出でまほしけれど、名のりもの憂ききはと思ふらむ、さらにこそ聞えね。さても、もて離れたる事にはあらじ。乱がはしくとかく紛れ給ふめりし程に、底清くすまぬ水にやどる月は、曇なきやうのいかでかあらむ」とほほゑみて宣ふ。

「名のりもの憂ききは」とは競争者内大臣を念頭においた謙遜を装つた自負であろうが、こうして自らを他と並べ、他人の弱点をひき出してけなすような光源氏の言動は、まさに光源氏自ら超越的な主人公の座を下つてきて、他の人物との間に人間的な關係を編み出していくような位置にゐることを示している。後に光源氏のことばを少将から聞かされた内大臣は「さかし。^{イかしこに}こここそは、年頃音にも聞えぬ山がつの子迎へ取りて、物めかしたつ

れ。をさをさ人の上、もどき給はぬ大臣の、このわたりの事は、耳とどめてぞ貶しめ給ふや。これぞおぼえある心地しける」とひらき直つて非常な反発を光源氏に感じている。

そうしてこういう周囲の人達と相対的な関係によつて、一人一人の人物の性格や生き方が問題とされてくると、必然的に光源氏の絶対者としての傷つかない健全な人間像は崩れてくる。夕霧に「朝臣や、さやうの落葉をだにひろへ。」というのだが、これは内大臣の心を決定的にゆさぶる非常に冷い効果的な皮肉である。

「……中将をいたくはしたなめて、わびさせ給ふつらさを思ひあまりて、なまねたしとも、漏り聞き給へかし」と素直さに欠けた、卑屈な方法による報復を試みるような弱々しい人間になつてきてしまつてゐる。

光源氏はあいかわらず美しく、ありがたい種々の才能を持つためでたい存在なのである。しかし、その彼は自身唯一の絶対者として、他を自己に奉仕せしめるという形ではなく、自己において同一次元に生きる他を批判し、他において自己を推し測られつつ物語は進行している。理想化された主人公光源氏の絶対性が保たれているかぎり客観的に他者を批判することはできないであろう。光源氏の絶対性は思いがけなく、周囲の人との触れあいのなかに崩れかかつてくるのである。^{註3}

光源氏は玉臺をどう処置すれば彼女の幸福を守ることができ、自らの欲求も満たすことができるものかと、明け暮れくり返してものを思つてゐる。蜚、常夏、篝火の巻々のとめどもなく流れでる内心の吐露は光源氏の世の中を達観している美しさと醜くさ、常識的な半面と、より自己に忠実であろうとする常識に逆らおうとする半面とが入りまじつて、複雑な、矛盾に満ちた人間の姿の一端を示している。そんな時、野分が吹いて、夕霧の前に光源氏の生活の全貌があらわにされてくる。即ち、夕霧は、六条院に住む女性達のすべてを次々に垣間みる。

紫上をみたまめ人夕霧の心の動揺は大きい。「大臣のいと氣遠く遙かにもてなし給へるは、かく見る人たゞにはえ思ふまじき御有様を、いたり深き御心にて、若しかかることもやと思すなりけり、」とそのこと——垣間見ということにより、光の心情を深く忖度する。光源氏の賛嘆されるべき存在様式を内側からのぞいてみようとするものである。

心にかけて恋しと思ふ人の御事はさしおかれて、ありつる御面影の忘れぬを、こはいかに覚ゆる心ぞ、あるまじき思もこそ添へ、いと恐しき事、と自ら思ひ紛はし、他事に思ひ移れど、なほふと覚えつつ、来し方行く末あり難くものし給ひけるか

な、かかる御中らひに、いかで東の御方、さるものの数にて立ち並び給ひつらむ、たとしへなかりけりや、あないとはし、と覚ゆ。大臣の御心ばへをあり難しと思ひ知り給ふ。

「恋しと思ふ人」を忘れさせるくらいに美しいまま母と「若く清げになまめきて、いみじき御容貌の盛」の光源氏をならべて「飽かぬ事なき御様ども」と賛嘆させられるのである。が同時に、二人のゆるぎない結びつきの中に、わり込む余地のない花散里（東の御方）を「あないとはし」とも思つてしまう。そして紫上との仲を最高に保ち、花散里にもその立場を守らせて、六条院をおさめている光源氏を「あり難し」と思うのである。ここで、夕霧の内面的心情において、六条院のみやびの生活は、ただ単に美的感覚的にすぐれた理想世界という観念によりとらえられているのではなく、光源氏それ自身の生きる場所と方法として反省せられているということが出来る。

以下、中宮、明石を見舞う時も、夕霧のこの光源氏の住む世界に初めて触れるような驚異の心で観察をしようとする態度はかわらない。そして、玉鬘のところでは「いであなうたて、いかなる事にかあらむ、思ひよらぬ限なくおはしける御心にて、もとより見馴れおはしたて給はぬは、かかる御思添ひ給へるなめり、宜なりけりや、あなうとまし、と思ふ心もはづかし。」と右近（夕顔

の侍女で今は玉鬘付きになつてゐる）をしても気づかしめなかつた二人の關係を知る。紫上につぐ理想の女性として光源氏の意図するままに、彼の資性に適応した六条院世界の花形として人々の憧れの焦点にいた彼女であるが、ここではつきりと、奇異な人間關係として、光源氏との結びつきが把握されなおしているのである。今まで作者、読者が一体となつてそこに沈潜し、陶醉していた理想世界から、飛躍的に抜け出して、その世界を直視しようとしているのである。作者はそのはじめに、主体的に願いを込めて築きあげた世界六条院を、夕霧という光源氏の息子を描き彼の心情においてあらためて照し出しているのである。そして、こうして光源氏をとりまく種々な人間關係が認識され直したかたちになると、物語は速度をはやめて展開をはじめると。

行幸巻になると、光源氏は玉鬘に尚侍になることを勧めている。大原野の行幸の日、玉鬘の前に、光源氏、帝、髭黒の大將、蜚兵部卿の宮、内大臣一家の人々が顔を揃える。玉鬘は、そこで自分との対応關係において男性達を考え、認識を持つ余裕が許されている。彼女の印象として多く語られるのは、光源氏、帝を除けば髭黒の大將である。否定的に、光源氏の世界に髭黒の大將は存在を許されぬようなかたちにおいてその描写は意識的である。

玉鬘の装束の準備がされ、腰結の役に内大臣が選ばれる。親子

はひきあわされるのである。このことが話される時、光源氏は、内大臣が夕霧を許さないことにこだわりを覚えているし、内大臣もそのことが気がかりになつてゐる。しかし、この会見は二人の心中とは別に、表面さりげなく玉鬘のことだけが運ばれて夕霧のことは触れられずに終わつてしまふ。

玉鬘の真相を知つた内大臣は喜びにわきたつが、光源氏に対して辛辣な推理を働かさずにはおかない。「尋ね得給へらむ初を思ふに、定めて心清う見放ち給はじ、やむごとなき方々を憚りて、うけばりてその際にはもてなさず、さすがにわづらはしう、物の聞えを思ひて、かく明し給ふなめり、」と光源氏の思つたままのことを洞察する。そしてこのことは後に夕霧を通して光源氏に伝えられることになり、光源氏の決心を迫まるのもこういう人々のこういうことばなのである。

玉鬘にあうことを許された内大臣はその美しさに打たれ驚き、光源氏に感謝するが、同時に夢占が思いあわされて、近江君をさがし出した苦々しさを味わつたり、玉鬘に対する光源氏の気持ちにまでも、内大臣らしい感覚で関心を寄せ、光源氏のあり難さを手放して賞賛するようなことはしない。

夕霧にしても、真実が明らかにされると、まめ人らしく、一度は「かのつれなき人の御有様よりもなほもあらず思ひ出でられて、

思ひよらざりける事よ、と、しれじれしき心地するものものすぐまた思い返す。夕霧の生活の表面で種々な感覚の経験が持たれるが、その時いつも彼の心を支えるのは雲井雁であり、彼女の存在は夕霧の心の奥深く位置を占めていて、彼の行動を決定している。光源氏との交渉においても夕霧のそういうあり方は変らず、光源氏の生活様式、感覚にまき込まれないで、自分自身を保ち続けている。

藤袴は念願が叶つて父娘の対面はしたものの、相変らず悩みから解放されない玉鬘の心中の叙述からはじまつてゐる。対面は許されても、実父に何の権利があるのでもなく、かえつて父娘の關係から解放された自由さから光源氏は執着強く迫るし、尚侍に出るのも秋好中宮や弘徽殿女御が控えていることを思えば遠慮させられる。加えて兄妹であつた頃の地位を利用して夕霧までがいい寄つてきたりする。光源氏の情報にこつつけて「上の御気色のただならぬ筋を、さる御心し給へ、」などというようなことをいうのであるが、これは夕霧が玉鬘にひかれてゐるからでもあるようだが、実は彼が玉鬘を尚侍に出そうとする光源氏の心中を見抜いているからでもあるようだ。

光源氏と夕霧の会話は二人の立場と心情を写して緊張したものである。周囲の人達が、そんなふうに分を見ているとは露知ら

ぬ光源氏は、玉鬘が宮仕えに気がすまないのは兵部卿の宮の熱意に動かされているからだろう、とか、それにしても若い女性が帝を見れば心を動かされない筈はない、とか調子よく語つて、夕霧にはね返される。——宮仕えに出るにしても姫君はどういう立場で他の方々と並んでお仕えできるというのでしょうか。中宮や弘徽殿女御があのようにしていらつしやるのですから、帝の愛をお受けすることができたとしてもその方々と肩を並べることはできないでしょう。兵部卿の宮との仲を裂いて出仕させたりして宮と父上との関係がまずくなりはいませんか、と論理立てて追求する。光源氏は、困つたものだ、夕顔に後事を託されているのだし、内大臣もひき取りそうになかつたので、などとごまかそうとする。夕霧の追求は続けられる。

「年頃かくてはぐくみ聞え給ひける御志を、ひがさまにこそ人は申すなれ。かの大臣もさやうになむおもむけて、大将のあなたさまの便に、気色ばみたりけるにも、答へ給ひける」と人の言葉を借りて疑いを追求している。光源氏の答えにも容赦なく迫ることを止めない。彼の尚侍にしようとする下心を、「内々にも、やむごとなきこれかれ年頃を経てものし給へば、えその筋の人数にはものし給はで、すてがらにかくゆづりつけ、おほぞうの宮仕の筋に、らうぜむと思し掟つる、いと賢くかどある事なりとなむ、よろこ

び申されけると、たしかに人の語り申し侍りしなり」とあばき出している。光源氏は、何とひどくひねくれた考え方をするものだろう。気を廻す性格なのですね。そのうち自然に、わかつてくるでしょう。ほんとによく気をまわしたものですよ。と笑いのうちに答えはするものの、「さりや、かく人のおしはかる、案におつることもあらましかば、いと口惜しくねぢけたらまし、かの大臣にいかでかく心清きさまを、知らせ奉らむ、と思すにぞ、げに宮仕の筋にて、げざやかなるまじく紛れたるおぼえを、賢くも思ひ寄り給ひけるかな、とむくつけく思さる。」と自分の疚しい秘密を探られて、背筋に冷いものを感じて寒々とした思いにかられている。そしてこれらの周囲の人達の見守る中で、欲するままに自由に行動する力を失っている。深く傷つき、その痛みに一人で堪えさせられているのである。

ここで光源氏は周囲の人達の確固たる信念から逃れがたくて、結局これらの人達との関わりあいの中に自己の存在を決定させられてしまつてゐる。彼が物語世界の唯一人の人であつた時とは百八十度回転して、周囲の人達の動きに自己の動きを合わせなければならぬような位置にいたのである。

真木柱冒頭、既に玉鬘は髭黒のものになつてしまつてゐる。光源氏の何ら関与しない力により玉鬘は奪われてしまつてゐるので

ある。光源氏は今は父親らしくふるまうより仕方がない。一応「いとほしう人々も思ひ疑ひける筋を、心清くあらはし給ひて、わが心ながら、うちつけにねぢけたることは好まずかし、」とほつとするけれども、諦め切るわけにはいかないでいる。「余所に見放つも余りなる心のすさびぞかし、と口惜し。」などと勝手なことを思いつづける。

しかし、光源氏にとつての打撃は続いて加えられる。内心のくやしき無念さを表面はうち繕つて親がり世間体を飾ろうとする彼のおおようなやり方を、内大臣、髭黒の大將は一向に意に介そうとはしない。玉鬘によつてひきおこされた大將家と式部卿の宮（髭黒大將の北方の父で、紫上の父でもある人）家との凄惨な争いに、玉鬘もしらじらしい思いをさせられるし、また式部卿の宮と光源氏の間にも怨恨が持たれて、紫上までが被害を蒙る次第である。六条院の調和的人間関係とはまったく相容れるべくもない、しかも誰にその不幸の原因を負すべくもない暗澹とした人間社会を描出している。

玉鬘を手元に置きたいという光源氏の願も、宮中に参内させたがつている光源氏の態度を髭黒に巧妙に利用されて、簡単につれさられてしまう。光源氏には無力な嘆きのみが残される。自分を無視して、周囲の人達が思うままにことを運んでしまったのがく

やしくてたまらない。涙が溢れるのをどうにもできずにいる。恋しさにさりげなく書いた手紙には髭黒から返事がくる始末である。「いと憎し」と思わずにはいられない。茫然と涙にくれる。

こうして玉鬘物語は一まず終る。六条院の安泰は保たれ、光源氏は変らずに物語の主人公としてあらまほしき姿でのぞんでいる。物語の現実的場面において、賞揚されるものは、光源氏の意向に添うものであり、「めざまし」、「にくし」と評されるものは彼の意向に逆らうものである。しかし、この光源氏の趣味性向に則る美しい彫琢された生活方法とは別に、人々は活発に動いて、それが光源氏の生き方と抵触すればそれに逆らつて思うがままに、自由に各々のやり方で生きようとしている。そしてそういう人々と接触する場面では光源氏はもはや高貴な超越的な裁決者としてすべての人の上にいるものではなく、同じように弱さを持った傷つきやすい人間でしかなくなっている。即ち、作者は光源氏その人を描いて彼を人間らしく描きあげることができなかつたけれども、^{註4} 彼を周囲の人との交わりの中にとらえた時、人間的な種々の感覚を持つものとして描き得ているのである。

こうして物語作者は意志的にではなく、その主人公をふり仰ぐような理想的な人間像としてではなくて、その時代に生きる人間のように考え、扱っているのである。物語らしさは思いがけなく、

作者の人間によせられる関心の強さ故結果的な変質をとげているのである。

少女巻で構想された夕霧の雲井雁との物語は、そこで成り立つた人間関係がそのまま蜚巻の結びにひきつがれ、玉鬘物語はそうした複雑にからみあう人間関係の綱目を辿りつつ、六条院世界の生み出した人間性の矛盾をあきらかにして、光源氏に触れあう人達の活躍により進展したのであつた。光源氏をとり囲むすべての人達が各々の立場で自己の欲求のままに生き、美しい六条院世界をよそに見て、醜く争闘する様を描き出した後、なすすべを知らぬ光源氏を六条院の中心にそつととり残して物語は終つたのである。

夕霧の物語は梅枝を経て藤裏葉で結末をみるのであるが、この両巻が玉鬘十帖に続きにくい幾つかの点は武田宗俊氏その他の方向によりしばしば論ぜられている。^{註5}この両巻における夕霧と内大臣は、上述の如き人格を持つものとしてのイメージは持てないのであつて、むしろ絵合などにみられた結局は光源氏を賞揚するにやむ副人物になつてゐるのである。このように人間らしさのつかみ出し方——古物語と根本的に異なる人間への対応の仕方の自由さ——からも武田氏の玉鬘系列後記挿入説は考える余地が充分にある。しかし、夕霧、内大臣像は、少年少女の恋物語を発端として

できあがつてゐるのであり、それは少女巻の一つの中心的テーマになつてゐる。それが玉鬘十帖にひきつがれてゐるということは一部の二つの系列のあることを否定するもののである。しかし、少女巻は阿部秋生氏の詳細な論述の中でも、帚木系列（武田氏の玉鬘系列）に入れられないので桐壺系列（武田氏の紫上系列）に入れられてしまつたような曖昧さが残されており、^{註6}風巻景次郎氏が新旧の年立を論じて矛盾を追求しておられるような成立論上から複雑な問題を持つ巻である。私も以上のような人間像を辿つた結果、あるいは少女巻は玉鬘十帖の執筆の途上において書き改められたのではないかという疑問を持つたのであつた。この問題については、許されるならば機会をあらためて考えをまとめてみたいと思う。

註1 頭中将は光源氏の物語の出発の時から並び称せられていたのであつたが、結局は光源氏の異常なまでの容貌、資質を合理化して表現する手段として描かれてゐるような存在でしかなかつた。「源氏の中將は、青海波をぞ舞ひ給ひける。片手には大殿の頭の中將、容貌用意人には異なるを、立ち並びては、なほ花の傍の深山木なり。」（紅葉賀）などの叙述にこの傾向が顕著にみられるであらう。

近江君のような人物形象が玉鬘物語のこの時点で創造されたということは意義深いものがあるように思う。この人物について、秋山虔氏「源氏物語の方法について——近江君とその周辺」(国語と国文学 昭和34・4)、野村精一氏「末摘花から近江君へ」(日本文学 昭33・2)等の論文を参照していただきたい。光源氏が主宰する六条院世界がその内部において動きがとれないような限界状況にある時、六条院の外の世界に、みやびを無視して、みやびの規範に生きようとする人々を辟易させながら天衣無縫にふるまう姫君を設定したということは、正面からは批判し、否定し去ることのできぬ主人公光源氏の存在の方法に、根本から、あらぬ方向から疑問をなげかけているのではないだろうか。

内大臣と近江君の結びつきは二重の意味で光源氏の住む世界を評価しているのではないかと考えられる。一つはみやびのすぐれた顕現者という物語の正当な側面から光源氏を賞揚して。これは光源氏と玉鬘の結びついた存在が高く評価されると同時に、夕霧をいたくはしたなめてまでも権勢欲に生きようとする内大臣に対する手きびしい報讎でもある。しかし、六条院世界の孕んでいる矛

盾はみやびの精神を徹底的に貫ぬこうとするところにあるのであつて、作者が近江君のような形象を理想的世界の行き詰まりの時点で創造したということは、作者がみやびそのもののあり方に何かをさぐりあてようとする文学的精神より発せられた高度な疑問の形で出された批判ではないだろうか。やがて玉鬘を六条院の外におしやり不調和な暗い世界を描出していく一連の物語の中に、この人物を置いて考えると、以上のような作者の問題の方向がさぐれるような気がするのである。

4 「今はまして、忍びやかにふるまひ給へど、行幸に劣らずよそほしく、いよいよ光をのみ添へ給ふ御容貌などの、この世に見えぬ心地して、めづらしう見奉り給ふにはいとど御心地のなやましきも、取り棄てらるる心地して、起き居給へり。」(行幸)

5 源氏物語研究 岩波書店 昭和29年刊

6 源氏物語研究序説下 九四三〜九九四頁 東京大学出版会 昭和34年刊

7 日本文学史の研究下 源氏物語の成立に関する試論「新旧の年立・並の巻・五十四帖の外の巻」・「玉かつらとその並の巻・桜人」風間書房 昭和36年刊

(昭三七 日文卒)